北海学園大学

# 日本語教員養成課程

『報告書』第 11 号

北海学園大学
2026 年 3 月

# 目　次

2025 年度の日本語教員養成課程を振り返って
日本語教員養成課程委員　丸島　　歩 …… 2

**2025 年度　日本語教育特別演習** …… 3

（実習生）

初めての大人数授業実践を通して　人文学部日本文化学科 4 年　伊原　綾花 …… 4

日本語教育特別演習における実践と課題―前期・後期の実習を通した振り返り―
人文学部日本文化学科 3 年　八島　梨緒 …… 6

『日本語教育特別演習』を終えて　人文学部日本文化学科 3 年　山川　　愛 …… 7

（協力学生）

三日間の実習見学を経て　人文学部英米文化学科 4 年　深田　　彩 …… 8

実習見学に参加して　人文学部英米文化学科 4 年　山田いおり …… 9

市内日本語学校の留学生との交流を通して
人文学部英米文化学科 3 年　田村　真愛 …… 10

**日本語教員試験勉強会**…… 11

新任教員としての歩み
人文学部日本文化学科（令和 5 年度卒業）　南原　あこ …… 12

日本語教員養成課程修了後の学びと実践報告
人文学部英米文化学科（令和 6 年度卒業）中川　弥乃 …… 13

日本語教員免許の取得まで 人文学部日本文化学科科目等履修生　金谷　恵実 …… 14

**留学生・海外の日本語学習者との交流活動**…… 16

（カトリック関東大学校（韓国）・オンライン交流会）

韓国カトリック関東大学とのオンライン交流会を終えて
人文学部日本文化学科 1 年　岡田　侑奈 …… 17

（レスブリッジ大学交換学生向け日本語研修）

レスブリッジ大学生との交流を通した実践と気づき
人文学部英米文化学科 4 年　雨山　柚菜 …… 18

（ウェリントン高校留学生向け日本語レッスン）

ウェリントン高校の留学生との日本語レッスンを通して得た学びと経験
人文学部日本文化学科科目等履修生　ゴンザレズ相川未希 …… 20

**学外の多文化共生の取り組みへの参加**…… 22

「ぺらぺらすいようび」の参加を通して
人文学部日本文化学科 3 年　藤田　実吹 …… 23

**研究紹介**…… 24

修士論文について　文学研究科日本文化専攻修士課程 2 年　藤野戸柾希 …… 25

# 2025年度の日本語教員養成課程を振り返って

日本語教員養成課程委員　**丸島　　歩**

日本語教育を取り巻く環境は、近年大きく変化しています。2019年に施行された「日本語教育の推進に関する法律」により、国や地方公共団体等における日本語教育推進の責務が明記されました。また、同年新設された在留資格「特定技能」などの影響もあり、在留外国人数は増加の一途をたどっています。それに伴い、日本語教師が活躍する場もいっそう広がりを見せています。

2024年には「日本語教育機関認定法」が施行され、「認定日本語教育機関」が創設されました。従来の「法務省告示校」が主に留学生を受け入れていたのに対し、認定校は「留学」「就労」「生活」の3分野に及ぶため、これまで以上に多様な現場に対応できる教員の養成が求められています。併せて国家資格「登録日本語教員」も新設されました。本課程におきましても「登録日本語教員養成機関」および「登録実践研修機関」の登録を目指すとともに、経過措置を活用した国家資格取得が可能なカリキュラムを運用しております。

こうした時代の要請に応えるべく、今年度の「日本語教育特別演習」では、新たな試みとしてレスブリッジ大学（カナダ）からの交換留学生を対象に、英語を媒介語とした教壇実習を実施いたしました。また、近隣の日本語教育機関のご協力のもとで行う実習も継続して実施しております。さらに、国内外の学習者と関わる活動や、学外の日本語支援の現場と学生をつなぐ取り組みも一層推進してまいりました。

「登録日本語教員」の資格取得に向けた支援としては、今年度初めて実施された「日本語教員試験（応用試験）」に挑む学生・卒業生を対象とした勉強会を、夏季休暇中にオンラインで開催いたしました。コミュニケーションアプリを活用して時間外でも質疑応答や情報共有ができる体制を整えた結果、参加した6名全員（全体では7名）が見事に合格を果たし、その多くがすでに日本語教育の現場へと羽ばたいています。

学術面におきましても、今年度は文学研究科より「特定技能」取得を目指す学習者への支援をテーマとした時宜にかなう修士論文が提出されるなど、着実な成果が見られました。

本報告書が、今年度の本課程における日本語教員養成の足跡を示すとともに、今後の展望を切り拓くものとなれば幸いです。

# 2025 年度日本語教育特別演習

日本語教育特別演習は、学生がより実践的な日本語教授の経験を積むことができるように設定された科目です。

2025 年度は、①カナダ・レスブリッジ大学交換学生向け日本語研修、②札幌青葉鍼灸柔整専門学校日本語科・初中級クラス、③交流を目的とした地域日本語教室の 3 か所で実習を行いました。

それぞれの実習の概要は以下のとおりです。

**①レスブリッジ大学交換学生向け日本語研修**

・2025 年 6 月 6 日（金）、9 日（月）、10 日（火）、11 日（水）9：00～10：20 （授業見学）
・2025 年 6 月 17 日（火）9：00～10：20　実習担当：八島理緒
・2025 年 6 月 18 日（水）9：00～10：20　実習担当：伊原綾花

**②札幌青葉鍼灸柔整専門学校日本語科・初中級クラス**

・2025 年 12 月 5 日（金）13：00～16：30 （授業見学）
・2025 年 12 月 9 日（火）13：00～13：45　実習担当：山川愛

**③交流を目的とした地域日本語教室**

・2026 年 1 月 19 日（月）14：00～15：30　実習担当：山川愛（初中級）
・2026 年 1 月 20 日（火）10：00～11：30　実習担当：八島理緒（中級）
・2026 年 1 月 23 日（金）10：00～11：30　実習担当：伊原綾花（中級）

次ページからは、実習生の振り返りレポート、③の教室授業の交流活動に参加した学生の感想レポートを掲載しています。

# 初めての大人数授業実践を通して

人文学部日本文化学科 4 年　**伊原　綾花**（実習生）

2025 年 5 月にレスブリッジ学生を対象に初級レベルの授業を行い、1 月には札幌ランゲージセンターの学生を対象に中上級レベルの授業を行った。この演習で実践をさせてもらうまでは個別授業か模擬授業の経験のみであったため、1 回目の授業は特に学生側の理解度や練習の成果をあまり掴めないまま、細かく計画を立てた教案に沿って進めていた。英語で教えるということもひとつの挑戦であり、日本語と混ぜるバランスも何がベストかわからないまま進めていた。教科書ともリンクして進めており、学生は教科書をかなり頼りにしていたが、私は教科書の内容をスライドに落とし込んで、ページ数も入れずにパワーポイントのみで進めてしまったため、そこにも学生のニーズとの乖離が生じていたように思う。そのため、授業後の振り返りでは、内容や使う言葉が初級学生にとって少し高度で、ついていけていない学生もいたこと、英語も日本語も混ぜて使っていて、話すスピードの速さや砕けた表現に注意する必要があること、教科書を用いて個人のペースで例文を確認できる組み立てになっていないことなど、後ろで客観的に見てくださっていた先生からいくつか指摘を受けた。計画通り進めることに一生懸命だった私が意識できていなかった、日本語教師として基本の気遣いが大半であったと思う。基本であるにも関わらず、そのような気遣いへの意識は、文法のわかりやすい教え方や練習の工夫に集中すると、実践時に容易に忘れてしまいやすいものである。

2 回目の授業では、中上級の学生が対象であることから、話し合いに必要なタメ口の会話表現を扱った。1 回目と大きく違うポイントは、日本語レベル、教科書が設定されていないこと、使用言語は日本語のみという点である。そのため、前回の反省を踏まえた再挑戦というよりは、新たな挑戦となった。タメ口の会話の授業で難しかったのは、どんな表現が自然によく使われているか、それはどのような文脈かを普段意識せず使っているところから引っ張ってくる必要があったこと、それを全く知らない人にも伝わる説明に落とし込むことだった。例えば、「（名詞）次第」という表現は「あなた次第」「天気次第」など、何かが原因で、物事が決まったり、変化したりする様子を表す。しかし、このような硬い説明だけだと伝わりにくいところがあるため、「～によっては」と同義であることや様々な例文を用意して慣れてもらった。また、今回の学生は、JLPT で N2 レベルに出てくる「（動詞）次第」の方を先に習っていたことから、「～したらすぐに」という意味以外にも「次第」の使い方があるということを説明した。このように、既に習っている内容とも繋げながら、新しい会話表現の説明や、なるべく興味が湧く内容の日常会話例文を作ることが今回力を入れたところであった。実際、授業においても盛り上がっていた要素であったと思う。今回は最初に学習者の名前を聞くことで一人一人を覚え、分からないことがあっても発言しやすい環境作りや理解

度を表情などから読み取る意識を持ち続けた。また、タスク学習として組み立てていたため、最後に札幌に旅行したい友達のための計画をそれぞれの設定に基づき、グループで話しながら立てるというアクティビティも計画していた。しかし、時間配分がうまくいかず、短い時間でやってもらう形となった。時間が延びていると気づいた時、練習の回数を減らす方向に進めたが、例文の量が多かったり、会話表現の複数オプションが分かりにくかったりしたのではないかという懸念もあるので、例文はなるべくオプションを増やさないようにしたい。アクティビティでの会話はタメ口ではあったものの、教えた表現がすぐに活用されているという様子は残念ながら見られなかったという結果もこの反省に繋がっている。振り返りでは、盛り上がった影響で私が笑いながら説明してしまうのが学生にとっては聞こえにくいだろうという指摘があった。日本語教師として気をつけるべき基本はまだまだ経験の積み重ねが必要だが、この演習で得た経験を足がかりに実践を積み重ねたいという気持ちが高まった。日本語教育課程の集大成としてこの演習に参加できたことは、知識をアウトプットすることにつながり、とても良い経験となった。



# 日本語教育特別演習における実践と課題
## ―前期・後期の実習を通した振り返り―

人文学部日本文化学科３年　**八島　梨緒**（実習生）

本実習において、私は前期にレスブリッジ大学の交換留学生を対象とした日本語授業を担当し、後期には札幌ランゲージセンターの学生との交流授業を行った。

前期の実習では、教科書の指定されたセクションを担当した。指導にあたっては、語彙やイラスト、場面設定などの細部に至るまで学習者に不明瞭な点が残らないよう細心の注意を払った。また、学習した内容を実生活で活用できるよう、ロールプレイなどのアクティビティを導入した。しかし、初めての教壇ということもあり、緊張から学習者の反応を十分に汲み取りながら授業を展開することができず、個々の様子に応じた柔軟な対応が課題として残った。

後期の実習では、授業のテーマ設定から構成までを自ら手掛けた。学習者の既習語彙が不明察な状況であったが、「日本語教育の参照枠」を指標に据え、担当したN2レベルに合わせて「文と文を論理的につなげる」というテーマを設定し、接続詞や理由説明の語彙習得を目標とした。後半のアクティビティでは、学習語彙を用いて一文作成するごとに投球できる「ボーリング形式の物語作り」を実施した。学習と娯楽を融合させたことで、構成面では高い成果が得られたと感じたが、一方で、語彙の解説に時間を割きすぎた結果、学習者の発話機会が減少したことや、例文の提示不足といった教え方の技術面に改善の余地が残った。

今回の実習を通じ、日本語教育に関する実践的な知見を得るとともに、同分野への関心を一層深めることができた。一連の経験から得た学びと反省を糧に、今後も日本語教員としての資質向上に努めたい。

# 『日本語教育特別演習』を終えて

人文学部日本文化学科３年　山川　愛（実習生）

「日本語教育特別実習」では、日本語学校での授業と、本学に学習者を招いて行った授業の計２回を実施した。

１回目の授業は、日本語学校にて 45 分間行った。実際に外国人学習者を対象に授業を行うのは初めてであり、不安も大きかったが、丸島先生に繰り返し練習に付き合っていただいたことや、過去に「日本語教育特別演習」を受講した先輩からの助言を受けたことで、授業として成立させることができた。

また、実習前には日本語学校の授業を見学する機会があり、学習者の理解度に応じて説明を細かくしたり簡潔にしたりと、臨機応変に対応する教師の姿が印象的であった。しかし、自身の授業では進行することに精一杯で、学習者一人ひとりの理解度に目を向ける余裕がなかった。実際に授業を行ってみて、授業を「計画通りに進めること」と「学習者に理解してもらうこと」は必ずしも一致しないということを強く実感した。この経験から、日本語教師には単に説明する力だけでなく、その場で状況を判断し、柔軟に対応する力が求められることを学んだ。

２回目の授業は、本学に日本語学校の学習者を招いて実施した。１回目とは異なり、教科書に沿って進めるのではなく、前半 45 分で文法や語彙の確認、後半 45 分でそれらを活用した簡単なゲームを行うという構成であった。90 分という長時間の授業であったため、内容のバランスや時間配分に苦戦したが、教授や TA の支えもあり、授業は大きな支障もなく進行することができた。特に、後半のゲーム活動では、学習者が積極的に発言したり、楽しそうに取り組んだりする様子が見られ、達成感を得ることができた。

一方で、授業全体を通しての反省点として、内容を十分に理解できていない学習者に対して、適切に対応することができなかった点が挙げられる。理解が追いついていない様子に気が付いても、どのように説明を補足すればよいのか判断できず、そのまま授業を進めてしまう場面があった。この経験から、事前の準備だけでなく、授業中に学習者の反応を観察し、必要に応じて説明の仕方を変える柔軟性が重要であると改めて感じた。

今回の実習を通して、授業は日本語教師が一方的に進めるものではなく、学習者とのやり取りの中で成り立つものであることを強く実感した。今後授業を行う機会があれば、独りよがりな授業にならないよう、学習者一人ひとりの反応や理解度に目を向けながら、その場に応じた授業ができるよう意識していきたい。

# 三日間の実習見学を経て

人文学部英米文化学科 4 年　**深田　　彩**（協力学生）

丸島先生から日本語教育特別演習の実習見学のお誘いをいただき、三日間、授業実習の見学をさせていただきました。

一日目は、初級クラスの学習者を対象とした授業でした。前半は授業で、後半は各々 4 人グループに分かれ、「人狼ゲーム」をしました。私のグループは自分以外の 3 人がネパールの出身の方で、時々ネパール語を話していました。そのため、休憩時間にはネパール語を教えてもらい、そして仲良くなることができて嬉しかったです。

アクティビティで行った「人狼ゲーム」では、ルール自体が少々複雑な部分もあり、理解できた学習者と少し難しそうにしている学習者がいましたが、グループ全体でお互いにわからない部分は教え合い、そして和気あいあいとゲームを楽しむことができたと感じております。

最後には、絵馬に今年の目標を書くアクティビティも行いました。絵馬を書く際に、日本語の文章の意味や漢字の書き方などを質問する学習者もいたので、アドバイスをしました。日本語学習の役に立つことができて、とても嬉しい気持ちになりました。

二日目も、初級クラスの学習者を対象とした授業でした。一日目と同様に前半は授業で後半は 2 チームに分かれて日本語クイズ付きのボーリングゲームのアクティビティを行いました。学習者のみなさんはとても積極的に発言をしていて、一日目と同様に和気あいあいとした雰囲気でゲームに取り組んでおり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

三日目は、中級クラスの学習者を対象とした授業でした。同様に前半は授業で後半は 5 人程度のグループに分かれて一日の観光マップを作成するアクティビティを行いました。また、授業では通常の速さの日本語や自然な話し言葉が使われていましたが、学習者はそれらを理解し、そして積極的に発言していました。その様子を見て、（中級の日本語学習者のレベルはこんなにも高いのか！）と驚き、とても印象に残りました。

三日間、日本語教育特別演習の実習見学をさせていただき、日本語教育の授業の見学やアクティビティを通して留学生と交流をしたことなど、非常に貴重で有意義な時間を過ごすことができました。実習見学で関わってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

# 実習見学に参加して

人文学部英米文化学科 4 年　**山田いおり**（協力学生）

今回、丸島先生にお声がけいただき、実習授業の見学に参加した。授業は、初級レベルの学習を終えたばかりのミャンマー出身の学習者を対象に、「ワードウルフ」を取り入れた活動が行われていた。私は見学という立場で参加したが、導入ではゲームのお手本として加わる機会もあり、実際の授業の雰囲気を体験できたことはとても貴重だった。

授業では、日本人を含む5、6 人のグループで活動が行われた。活動前は、どのようにすれば学習者に発話してもらえるか少し不安に感じていたが、実際にはその心配がいらないほど、学習者たちは積極的に発言していたのが印象的だった。時折、母国語で会話する場面も見られたが、「先生、わからないから」と周囲の学習者が日本語で話そうと気遣う様子もあり、学習者同士の関係の良さも感じられた。

また、授業を担当していた学生の関わり方も印象に残っている。学習者の発言をよく聞きながら、それを例として取り上げたり、授業内容と結びつけたりしていたのが印象的だった。笑顔で接していたこともあり、学習者にとって話しやすい雰囲気が作られていたように感じた。こうした関わり方が、学習者の安心感につながり、発話を促していたと考えられる。

さらに、自分自身が「先生」と呼ばれたことも強く印象に残っている。模擬授業の担当ではなかったものの、そのように呼ばれたことに驚きと嬉しさを感じると同時に、それに見合うような態度で関わる必要があると感じた。授業の最後に、それぞれの目標や叶えたいことを書く活動では、「先生、見て」と日本語の使い方が合っているか何度も確認しながら、一生懸命取り組んでいる姿が見られた。その熱心な様子に、こちらも丁寧に応えたいという気持ちになった。

今回が外国の学習者と実際に関わる初めての機会であり、当初は不安もあったが、実際に接して見ると積極的で意欲的な学習者が多く、とても良い経験となった。今回の経験を通して得た気付きを、今後自分が教員として授業を行う際に活かしていきたい。

# 市内日本語学校の留学生との交流を通して

人文学部英米文化学科 3 年　**田村真愛**（協力学生）

私は、1 月 19 日、20 日、23 日に学内で行われた日本語教育実習の見学と留学生との交流会に参加しました。今回、このような場に参加し、論文などで得た知識とは異なる新たな知識や気づきを得ることができました。

今まで、留学生と直接会い、会話をするなどの交流をした経験が無いため、わかりやすい日本語を適切に使用し会話をすることができるだろうかと、当日を迎えるまで緊張していました。当日は、前半 45 分で教育実習を行い、後半 45 分で留学生と交流をしました。教育実習では、日本語教員養成過程を受講している学生による日本語の授業を見学しました。それぞれの日程において、留学生の日本語レベルが N3（中級）、N2（中上級）と異なっていたため、それぞれ留学生のレベルに合う授業を見学することができました。留学生との交流会では、ワードウルフやボーリングといったゲームを用いながら交流したり、また別の日には札幌での観光プランを考えるといった多様な方法での交流をしました。ワードウルフを用いた交流では、カードに書かれたキーワードの特徴を伝えるという内容でしたが、色や形といった共通認識として存在しているものは伝わりやすい一方で、用途や使用場面など個人によって異なっている内容の場合には、より簡単な日本語で伝える必要があるということを学びました。観光プランを考える交流では、観光地の特徴を簡単な言葉に言い換えながら、その特徴の独自性を失わないように伝えることが最も難しく感じました。

今回の交流会への参加によって、日本語学習者にとって伝わりにくい内容には、どのような傾向があるのかを知ることが出来ました。今回得た知識を基に、今後も日本語学習者にとって伝わりやすい日本語と伝わりにくい日本語についての学びを続け、日本語学習者の助けになることが出来る人材になりたいと考えました。

# 日本語教員試験勉強会

登録日本語教員資格の取得を目指す学生や卒業生を対象に、夏休みを中心に勉強会を実施しました。卒業生が遠方にいるケースもあったため、Zoom によるオンラインで行いました。

勉強会では聴解問題の解説、重要な用語の整理に加え、市販の問題集等で参加者がつまずいているところを解消することを目的に、疑問点の共有を行いました。

また、コミュニケーションアプリの Discord を活用して、受講者同士で勉強法の情報共有や、交流も行われました。

**勉強会実施日時**

- 8 月 10 日（日）10：00〜12：00
- 8 月 17 日（日）10：00〜12：00
- 8 月 31 日（日）10：00〜12：00
- 9 月 7 日（日）10：00〜12：00
- 9 月 14 日（日）10：00〜12：00
- 10 月 5 日（日）10：00〜12：00

次ページからは、日本語教師として働きながら試験に臨んだ卒業生や、セカンドキャリアとして登録日本語教員資格を取得した科目等履修生のレポートをお送りします。

# 新任教員としての歩み

人文学部日本文化学科（令和５年度卒業） **南原　あこ**

私は現在、函館にある理知の杜日本語学校にて、2025 年 10 月より専任教員として勤務しています。主にネパール、ミャンマー、バングラデシュから来日した学生に日本語の授業や進路相談、生活指導を行っています。新卒で初めて日本語学校に勤務することとなり、不安と期待が入り混じる中でのスタートでした。

大学卒業後はすぐに就職せず、１年間オーストラリアへワーキングホリデーに行きました。異文化の中で生活し、言語を学ぶ側の立場を経験できたことは、言語を教える立場になった現在にも大きく影響しています。そのような期間を経て帰国後、急遽ご縁をいただき、本校への就職が決まりました。準備期間が十分にあるとは言えない状況でのスタートであり、さらに就職が決まってから日本語教員試験の勉強を本格的に始めたため、正直なところ不安も大きいものでした。

仕事と試験勉強の両立は容易ではありませんでしたが、丸島歩先生が主催してくださった勉強会に参加させていただいたことが大きな支えとなりました。理論の整理や出題傾向の分析だけでなく、学習の進め方そのものについてもご助言をいただき、独学では得られなかった視点を多く学ぶことができました。また、それぞれ試験勉強の中で生まれた疑問などを勉強会の皆さんと共有することで、新たな気づきが生まれ、理解をさらに深めることができました。同じ目標を持つ仲間とともに学ぶ環境があったからこそ、最後まで諦めずに取り組むことができ、無事に合格することができました。この場をお借りして、丸島先生、南明世先生、勉強会の皆さんに改めて心より感謝申し上げます。

日々の授業においては、試行錯誤の連続です。特に悩んでいるのは、レベルの異なる学生たちにどのように教えれば、全員にとって理解しやすい授業になるのかという点です。ある程度レベル分けされた同じクラスの中でも日本語能力や学習経験には大きな差があり、理解の速度や課題への取り組み方にも違いが見られます。また、学習意欲の差も課題の一つであり、どのようにすればクラス全体の学習意識を高められるのかを模索しています。個々の学生に目を向けつつ、クラス全体としてのまとまりをどのように作るかは、今後も向き合うべき重要なテーマだと感じています。

本校は現在、登録日本語学校認定に向けて準備を進めており、教育体制や書類整備など多くの課題に取り組んでいます。新任教員として未熟さを痛感する日々ではありますが、学生一人一人と真摯に向き合い、実践と反省を重ねながら成長していきたいと考えております。

〈日本語教員試験勉強会〉

# 日本語教員養成課程修了後の学びと実践報告

人文学部英米文化学科（令和６年度卒業） **中川　弥乃**

日本語教員養成課程修了後、登録日本語教員試験に向けて夏休み期間中に勉強会へ参加した。先生に推薦していただいた参考書を使用し、前半は読解問題に重点的に取り組み、後半は聴解問題対策を行った。各回、事前に該当セクションを解き、不明点や疑問点を整理したうえで、Zoom 上で確認し合う形式で進めた。この学習方法により、自身の弱点を客観的に把握しながら理解を深めることができた。

特に、日本語教員養成課程の授業では十分に扱いきれなかった「日本語教育参照枠」などの制度的側面についても学ぶことができ、日本語教育を取り巻く社会的背景や今後の動向への理解が深まった。また、参加者同士でおすすめの教材や練習問題を扱う動画を紹介し合うなど、情報共有が活発に行われたことも大きな刺激となった。互いに学び合う環境の中で学習を継続できたことは、勉強会ならではの意義であったと感じている。

その後、登録日本語教員試験に合格し、現在は星槎道都大学にて非常勤講師として勤務している。前学期に担当した「日本語事情Ⅰ」の授業では、初級レベルの中国人・台湾人学生６名を指導した。学生間で日本語能力に差があるため、理解度に応じた説明や活動の工夫を意識した。

授業では、学生が日常生活で直面している課題を中心に取り上げた。例えば、大学のある北広島市ではごみの分別が細かく定められているため、絵カードを用いてごみの種類を学習し、提示されたカードが何ごみに当たるかを考える活動を行った。実生活と結びついた内容は学習意欲の向上にもつながり、日本語が生活を支える道具であることを実感させる機会となった。

また、ひらがなの定着を目的にカルタを活用し、最終的には学生自身にカルタを作成させて実践した。普段は控えめな様子の学生も、活動中は積極的に参加し、教室全体が活気に包まれた。楽しみながら学ぶ活動の効果を改めて実感するとともに、学習者の特性に応じた授業設計の重要性を再認識した。

養成課程で学んだ理論や教授法は実践の基盤となっているが、初めての授業ということもあり、自身の指導が十分に学習者の力になっているのか不安を抱くこともあった。しかし、その都度振り返りを行い改善を重ねる中で、理論と実践を往還することの重要性を改めて実感している。今後も自己研鑽を続けながら専門性を高め、学習者一人ひとりに寄り添う日本語教育を実践していきたい。

# 日本語教員免許の取得まで

人文学部日本文化学科科目等履修生 **金谷　恵実**

## 日本語教員養成課程の受講

2025年にセカンドキャリアとして登録日本語教員の資格を取得しようと思い立ち、日本語教員養成課程を科目等履修生として受講しました。私は新聞校閲の仕事をしており、日本語に対する関心と、書き言葉の知識は多少ありました。また、通常2年は必要な養成課程ですが、出願後、在学中の単位が認められて、頑張れば一年でなんとか資格取得も出来るかもしれないことがわかりました。

しかし教育学や音声学、社会・文化・地域など幅広い知識が求められることを知り、本業も変わらず続けていますので、当初はじっくり2年くらいかけて取り組もうと考えていました。

久しぶりに受ける大学の講義はたいへん興味深く、母校でもあるので雰囲気も懐かしく感じられて楽しく通えました。

## 登録日本語教員試験にチャレンジ

国家資格への挑戦は初めての経験でした。2月、大学へ通いはじめる前にアルク出版「日本語教員試験まるわかりガイド」を買い、試験で頻出の語彙を自分なりに覚えていこうと少しずつ取り組みました。

4〜7月は日本語教授法や日本語教育演習など前期の授業を受け、その程度の事前学習ではまったく足りないと気づきました。自分の弱点が見えてきた時期でした。正直、記憶力は落ちているので、いかに語彙の意味も含めて自分のものにしていくかに注力しました。講義でさまざまなストラテジーを学びましたので、それを自分の学習に応用していきました。

## 夏休みのオンライン勉強会

試験の概要をはっきり把握して、リスニング対策を全くしていないことに気がついたのは夏休みに入る前でした。養成課程担当の丸島歩先生からオンライン勉強会の案内があり、参加。推奨の問題集を買い、指定のページを宿題としてやり、疑問点を把握する。夏休み中毎週日曜午前に先生が質問に答え解説する、という形式でした。

自習で問題を解き、解説を読んでもよくわからない、ネットで検索して調べてもどうもピンとこない、という問題はたまにあります。そういったことを先生に聞けてたいへんありがたい勉強会でした。

また、多くの参加者がアクセントのリスニングに苦労していることを知った丸島先生が、実際に

何度も発音して高低の聞き分けのコツを丁寧に解説してくれました。この解説を聞いて、リスニングも問題数をこなせばいけるかも、と自信が付きました。この勉強会のおかげで夏休みが終わるくらいから、「これはもしかしたら、うまくいけば一年で資格取得できるのでは？」と欲が出てきました。

**試験本番**

試験が 11 月でしたので、後期は追い込みの時期です。勉強会で使った問題集をやり込み、リスニングで耳を慣らしました。

対策はしたのですが、それでも本番の手応えはあまりありませんでした。難しさに落ち込みそうでしたが、「合格基準は 6 割、4 割は間違えても OK」と自分に言い聞かせました。応用試験は問題自体が推論して考える必要があり、解きながら学んでいるような感覚になる、ふしぎな経験でした。試験が記述ではなく、マークシート方式なのは幸いでした。語彙を正確に覚えていなくてはならない記述式だったら、片仮名の用語やアルファベット略語の暗記ができずに断念していたかもしれません。

目標としていた資格が取得できましたので、今後は日本語教員として一から経験を積んでいくつもりです。自分が第二言語として英語を学んでいた時代から比べると、日本語教育の参照枠の言語教育観、第二言語学習の理念にはいい意味で大きな変化が感じられます。学んだことをどう生かすか楽しみにしております。

最後にこの場をお借りして、いつもお世話になっております丸島先生はじめ、模擬授業で丁寧なご指導いただきました森先生、演習で詳しくサポートいただいた竜野先生、ともに楽しく授業を受け、励ましてくれた友人、家族ほか、多くのお世話になった方々に感謝申し上げます。

# 留学生・海外の日本語学習者との交流活動

本課程では、受講学生がさまざまな日本語授業のあり方を体験し、多様な日本語学習者と交流することを目的に、学習者との交流や授業見学の機会を積極的に設けています。

2025年度は以下の行事を実施しました。

次ページ以降に、これらの行事に参加した学生のレポートを掲載します。

### 1）オンライン交流会（韓国・カトリック関東大学校の学生との交流）

- 日時：2025年4月30日（木）、5月15日（木）、22日（木） 18時～18時30分
- 内容：オンライン（Zoomによる）初級クラスの大学生との交流

### 2）レスブリッジ大学交換学生向け日本語研修への参加

- 日時：6月4日（水）、5日（木）、6日（金）、9日（月）、10日（火）、11日（水）、16日（月）、17日（火）、18日（水） 9時～10時20分
- 内容：レスブリッジ大学からの交換学生向けの日本語研修（サバイバル・入門レベル）

### 3）ウェリントン高校留学生向け日本語レッスン

- 日時：2025年5月12日（月）、15日（木）、26日（月）、29日（木）、6月5日（木）、12日（木）、16日（月）、19日（木） 10時35分～11時40分
- 内容：北海高校、札幌高校への留学生（ニュージーランド・ウェリントン高校）向けの日本語レッスン（初級レベル）、文化体験

### 4）大阪大学日本語日本文化教育センターの日本語授業オンライン見学

- 日時：2025年6月4日（水）（授業 13：30～14：15／質疑応答 14：15～15：00）、27日（金）（授業 14：15～15：00／質疑応答 15：05～15：50）、11月28日（金）（授業 14：15～15：00／質疑応答 15：05～15：50）、2026年1月13日（火）（授業 15：20～16：05／質疑応答 16：10～16：55）
- 内容：中級漢字・語彙、中級文法

# 韓国カトリック関東大学とのオンライン交流会を終えて

人文学部日本文化学科１年　**岡田　侑奈**

カトリック関東大学校とのオンライン交流会が 2025 年 4 月 30 日、5 月 15 日、5 月 22 日の 3 日で行われ、私は 5 月 15 日のみ参加しました。交流会は Zoom で実施され、時間は 30 分でした。私は以前から韓国に興味があり韓国人学生と交流したいと思い、参加を決めました。交流会の流れとしては、まず全体で簡単な挨拶をし、日本人学生 1 人と韓国人学生数人でグループになって分かれます。その後、丸島先生が用意してくださったスライドを見せながら、北海道・札幌について紹介するというものでした。

当日、グループに分かれ、韓国の女子学生 2 人を担当しました。私は 2 人が理解できるように簡単な日本語で説明しようと心掛けましたが、そうすると話を広げることが難しく、私が淡々とスライドの説明をする形になってしまったのが心残りです。しかし、2 人は私の説明でわからない言葉があると、「〇〇って何ですか」と質問をしてくれました。その姿から、きちんと聞いてくれていることが伝わり、とてもうれしく感じました。同時に、質問に答えるため、日本語の言葉を日本語で説明することの難しさにも気づかされました。私はジェスチャーを使ったり、より簡単な言葉に言い換えたりして説明しようとしましたが、今振り返るともっとわかりやすい説明ができたのではないかと反省しています。

スライドの説明が終わった後は、2 人とフリートークをしました。どのような話題であれば、相手が理解しやすく、楽しく会話ができるのかを考え、最初はなかなか言葉が出ませんでした。丸島先生に助けていただきながら話を進めると、2 人は日本のアニメや J-POP に興味を持っていることを教えてくれました。また、私の大学生活についても質問をしてくれ、日本に対する関心の高さを感じました。私は韓国のことを知りたいという思いで参加しましたが、相手もまた、日本について知りたいと思ってくれていることにとてもうれしく感じました。

私は現在韓国の大学に留学しており、日本語専門の学科に所属しています。日本に興味を持っている学生が多くいる環境で、これからさらに多くの韓国人の学生と交流していくことになります。今回の経験を踏まえ、どのようにすれば言葉の壁を越え、よりわかりやすく伝えられるのかを考え続けたいと思います。30 分という短い時間でしたが、今の私につながる非常に意味のある時間でした。交流してくださった学生さんと丸島先生に心から感謝申し上げます。

# レスブリッジ大学生との交流を通した実践と気づき

人文学部英米文化学科４年 **雨山　柚菜**

昨年６月、筆者はレスブリッジ大学からの留学生との交流プログラムにサポート学生として参加した。本稿はそのプログラムにおける報告である。

筆者が参加したのは主に学生主導のレクリエーション企画と、日本語研修への参加である。

まず、学生主導のレクリエーションでは縁日をテーマにした日本の遊びを用意した。型抜きと折り紙のコーナーを担当し、留学生に教えながら共同で作業を行うことになった。型抜きでは苦戦しつつも「イカゲームだ！」という反応が多く、思わぬところで共通の話題が生まれ、留学生たちと一気に打ち解けるきっかけづくりに成功した。折り紙では英語の説明書を用意したものの、紙を折って整形するという作業に馴染みが無いようで、横で手本を見せながら作成する時間が大半を占めていた。確かに、折り紙遊びに慣れていないと、日本人でも「谷折り」「山折り」といった用語が理解できないことは多い。英訳の説明書も馴染みのない単語があり、また絵だけではうまく想像できない部分も慣れない人に特有の現象と言える。しかしその結果、留学生は折り紙における動詞や動名詞を英語ではなく日本語で覚えることになった。「kawaii」や「umami」のように、「origami」や「yamaori」も借用語として定着するかもしれない。

日本語研修では、丸島歩先生、南明世先生の授業に日本語のネイティブスピーカーとして参加し、主にテキストの音読やペアワークの相手役を務めた。ほとんどの学習者がゆっくりひとつひとつ単語や助詞を考えながら発話していたので、こちらもゆっくり話すこと、はっきりと抑揚をつけて話すことを意識した。初級レベルの単語を使った会話を心がけ、小学低学年が理解できそうな範囲を意識したものの、学習者には理解できない場面もあり、相手のレベルに合わせた会話の難しさを実感した。

学習者の多くは事前に日本語に触れている者が多く、ローマ字のルビを振られた文章なら問題なく読めていた。練習をするにつれ、テキストと全く同一の会話であれば、何も見ずに話せるようにもなったが、筆者や講師を含む日本語話者が多少の変化をつけた会話に試みた場合、理解できない学習者は笑う、相槌や「はい」「いいえ」のみで答える、無言になるなどの反応を見せていた。

初級レベルの内容ではあったが、中には中級序盤ほどの会話を試みている学生もおり、クラス内でのレベル差が発生していることに気が付いた。今回はレベル分けテストなどは実施していないため、このような差が生まれたのだと考えられる。学習者により充実した授業を提供するため、またクラスのレベル差をできるだけ抑えるためのテストや習熟度テストの必要性を実感した。ただ、レベルの高い学習者は他の学習者の意欲やクラス全体の積極性を増幅させており、良い影響も与えていることが分かった。

全体をとおして、学習者のレベルや意欲には幅があり、興味関心も一様ではなかった。英語やジャスチャーを交えた会話であれば大きな問題はないが、日本語でのみの会話は成立しないことが多く、日本語教育における学習者との意思疎通の難しさを痛感した。外国人雇用が増えている昨今、日本語教育への関与を問わず、国内での言語の壁を感じることは多くなるだろう。「やさしい日本語」などを参考に、日本語学習者との会話方法を模索していく姿勢は重要だ。

# ウェリントン高校の留学生との日本語レッスンを通して得た学びと経験

人文学部日本文化学科科目等履修生 **ゴンザレズ相川　未希**

科目等履修生として日本語教員養成課程を履修している私ですが、2025年6月頃に行われたウェリントン高校の留学生二名との日本語レッスンに何度か参加させていただくことができました。このレッスンでは、まず皆で少しスモールトークをし、その話の流れからその日に学習する予定である単語や文法を引き出して、丸島先生が事前に準備してくださっていたプリントを用いてそのまま授業内容へ進んでいくという流れでした。授業内容は、ワークシートに日本語で記入するような書く練習もしましたが、主に会話練習が中心でした。ニュージーランドの祝日や文化、自分のやりたいことや欲しいもの、今までに訪れたことのある国など様々なジャンルの話題で会話の練習をしていました。

この会話の練習では、会話練習の相手としての経験を積むことができ、さらに私自身も丸島先生からご指導やアドバイスをいただいてたくさんのことを学ぶことができました。例えば、「〜たら」の表現を練習していた時、私が何気なく「晴れだったら…」と言うと先生が、名詞の『晴れ』を使っての「〜たら」はもしかするとまだ習っていないかもしれないので、動詞の『晴れる』を使って「晴れたら」の形で今日は練習しましょうか。と教えてくださいました。この助言のおかげで気づいたことは、学習者の方に対しての語彙選択の時、その方の学習段階を踏まえてどちらの語彙を使うのが適切であるかを瞬時に選択することが重要であり、その選択ができるようになるためには私自身、あらゆるパターンのカリキュラムやシラバスを頭に入れておかなければならないということです。

そして、留学生二人との会話で特に印象的だったのは、ニュージーランドの祝日について話していた時に『マタリキ』というマオリの新年を祝う特別な行事について教えてくれたことです。『マタリキ』に伝わる神話や、どのような行事か、何をどのように食べるかなど詳しく話してくれました。この時、自分の高校生時代に自国の祝日や伝統についてこんなに詳しく人に説明できただろうかと自問自答しましたが、多分できなかったと思います。それに比べて、二人はまだ若いにも関わらず、自分の国のことをよく知っていて、さらにしっかり話すことができていたのでそれがとても素敵に感じました。それと同時に、先住民族の伝統や思想を現代においてもニュージーランドの文化として継承し、国の祝日としてお祝いしているニュージーランドという国が素晴らしいと感じました。二人の日本語上達のために日本語会話の相手を務めているはずが、いつの間にか自分自身も留学生の二人から新しいことを学び、やり甲斐を感じましたし、何よりとても楽しかったです。

今回この報告書の依頼をいただき、ウェリントン高校の二人と過ごした時間をゆっくり思い出せる機会となりました。そのうちの一部を上記に挙げましたが他にも七夕の歌の歌詞を一行ずつ追い

ながら意味や七夕の伝説を先生が説明してくださって、最後にみんなで短冊に日本語でお願いごとを書いて笹の葉に結んだ日もありました。二人には数回しか会うことができませんでしたが私にとっては素敵な思い出で、とても貴重な経験となりました。この経験は間違いなく今後の人生に生かされていくと思います。ありがたいことに他にもボランティアの機会をいただき、いくつか参加させていただきましたが、実際に日本語を学習している方と接する機会は貴重ですし、ボランティアという経験を通して新しい知識や感覚を得られることはとても大切なことだと感じております。このような機会をくださった丸島先生には心より感謝しています。もしまたご縁があれば是非参加させていただきたいです。これからもたくさんの日本語学習者の方々に出会えることを楽しみにしております。

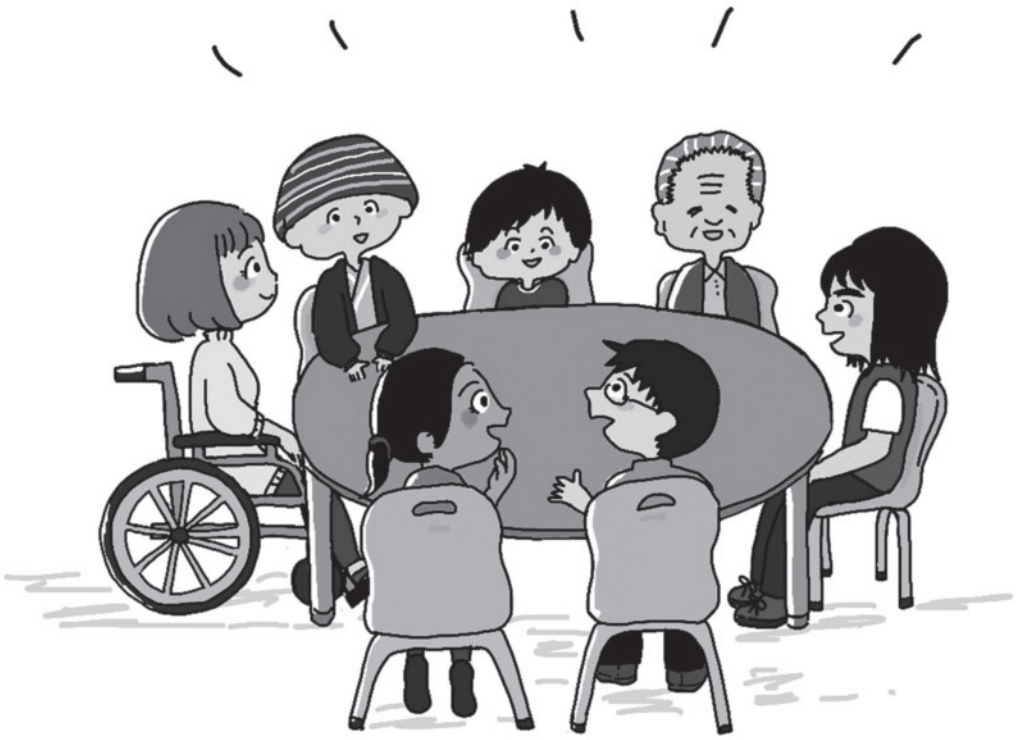
# 学外の多文化共生の取り組みへの参加

本課程では日本語教育、日本語、日本文化、多文化共生などに関わる幅広い科目を提供していますが、学生が学んだ知識を実践的に活かす場は、一部の科目に限られています。そこで、学外での実践的な活動への積極的な参加を促しています。

ここでは、公益財団法人札幌国際プラザが運営する「ぺらぺらすいようび」にサポーターとして関わっている学生のレポートをご紹介します。

「ぺらぺらすいようび」は、札幌に滞在する外国人がボランティアと日本語で会話をする場を提供する、公益財団法人札幌国際プラザの事業です。2024 年 6 月に始動し、札幌近郊の大学で日本語教育や国際交流などについて学んでいる大学生がサポーターとして運営に関わっています。

本学からは、日本語教員養成課程の受講生や開講科目の履修生がサポーターとして活動しています。学生たちにとっては、地域日本語教育のあり方や多文化共生を実践的に学ぶ貴重な場になっています。



# 「ぺらぺらすいようび」の参加を通して

人文学部日本文化学科３年 **藤田　実吹**

日本語教員養成課程の一環として、毎週水曜日に大通りの札幌国際プラザで行なわれている「ぺらぺらすいようび」というイベントに参加しています。ここでは、1テーブル3〜4人で30分ごとにグループを変えて会話をするということを行っています。1テーブルの中に1、2人日本語話者がいて、その他は日本語学習者です。

このイベントに参加する日本語学習者の日本語のレベルは本当に人それぞれで、もう何年も勉強している人、聞き取りはできるけど話すのが苦手な人、英語しか話せない人などです。さらに、来る目的もそれぞれ違っていて、おしゃべりをしに来る人、ノートやメモ帳を持って来て聞いた単語をメモする人、生活するうえで気になっていることを聞きに来る人などです。そのため、毎週色々な国の人と色々な事について話すことができます。

私は英語が得意ではなく、始める前はその部分が一番不安でした。しかし、英語が得意ではなくても、「やさしいにほんご」や、1テーブルに1つ用意されているホワイトボードを使って、コミュニケーションをとることができています。それでもどうしても伝わらない場合は、スマートフォンで画像を見せたり、翻訳した文章を見せ合ったりしています。始めた頃は、「どうしたら相手に伝わるのか」ということを考えながら会話をするのが大変で、会話が止まってしまうこともたくさんありましたが、今ではだんだん慣れてきて、自分から話題をふって会話をすることが多くなってきたように感じます。

この活動を通して、改めて「やさしいにほんご」の大切さや、言葉を伝える難しさを感じました。大学の演習で学習者役をやっていたのは日本人だったので、実際の学習者との会話で、「やさしいにほんご」を使う練習にもなっているし、自分の言葉選びの課題などにも気づくことができました。さらに、毎週色々な人と会話をすることができて、それが1週間の中で楽しみになっているので、そこも、日本語教育の講義のモチベーションになっていると思います。

# 研究紹介

次ページからは、本課程を修了したのち、日本語教員として勤務しながら修士課程を修了した大学院生の研究についてのレポートを掲載します。

「特定技能２号を目指す外国人のための適切な学習支援のあり方―農業分野における耕種農業を中心に―」と題された論文で、2019 年に新たに創設された在留資格「特定技能」、その中でも特に北海道内での受け入れが多い農業分野に関する研究です。



〈研究紹介〉

# 修士論文について

文学研究科日本文化専攻修士課程２年 **藤野戸柾希**

本論文は、特定技能２号農業分野、特に耕種農業の在留資格の取得を目指す外国人に対する適切な学習支援のあり方を検討した。近年、日本では農業従事者の高齢化と人口減少が進行しており、労働力不足が深刻な課題となっている。その対策として外国人労働者の受け入れが拡大しており、2019 年には在留資格「特定技能」が創設された。特定技能の中でも、特定技能２号は熟練した技能を有する外国人を対象とした制度であり、在留期間の更新制限がなく、家族帯同も可能であることから、在留資格取得を目指す人が増えている。しかし、この資格を取得するためには「2 号農業技能測定試験」に合格する必要があり、試験対策として利用できる学習材は総ルビ付きの日本語版のテキストのみである。試験は日本語のみで実施している。唯一公開されているテキストについて、テキストの難易度は相当高く、日本語学習者にとって理解が困難であると考えられる。学習者のテキストの理解度を上げることは、試験の合格のためだけでなく、今後日本で生活し農業に従事するうえで重要なことだと考えた。

そこで本研究では、特定技能２号農業分野の学習材として公開されている『2 号農業技能測定試験【耕種農業】』（以下、『学習用テキスト【耕種】』）を対象に、日本語の観点から学習者の理解を妨げている要因を明らかにし、それを踏まえた学習支援の方法を検討することを目的とした。まず、テキストに含まれる語彙、文法項目、文章の難易度を分析し、想定される学習者の日本語能力（日本語能力試験 N4～N2 程度）との比較を行った。語彙については形態素解析および語彙レベル判定ツールを用いて品詞の集計を行い、旧日本語能力試験による級別のレベル判定を行った。文法項目は旧日本語能力試験の２級・１級文法を抽出し、総出現数を集計した。文章の難易度については、日本語文章難易度判別システムを用いて測定した。

これらの分析の結果、『学習用テキスト【耕種】』の理解を妨げている可能性が高いものとして、語彙と文章の難易度であることが判明した。中でも、語彙、特に名詞については、学習者の日本語能力を大きく上回る語彙が多数含まれており、専門用語の多さなどが内容理解を大きく阻害していると考えられる。

分析結果を踏まえ、「2 号農業技能測定試験」の学習者に対する具体的な学習支援の方法について検討した。農業分野で働く特定技能外国人の学習環境は整備されておらず、教材開発に十分な人的リソースやコストを割くことも難しい。そのため、本研究では、生成 AI を活用することで、コストをかけずに、学習者や学習支援者自身が目的に応じた学習材を効率的に作成し、学習や学習支援に活用することを提案した。まず N2 レベルの学習者の学習の指標となるような語彙リストを作成した。そして、語彙リストと生成 AI を用いて語彙理解と読解の補助に資する学習材を作成し

た。語彙リストの作成にあたって、まず高難度語彙が実務でよく用いられている可能性が高いことを考慮した。こうした語彙は、実務の中で自然に習得が進められる可能性がある一方で、試験対策や業務遂行のために、意識的・優先的に習得する必要がある語彙である可能性も考えられるため、高難度語彙と他の語彙を区別するために農業従事者へのアンケート調査を行った。さらに、作成した語彙リストをもとに、語彙理解を補助するための読解型の学習材を作成し、その具体的な活用方法を提示した。本研究で開発した語彙リストおよび学習材は、学習者と学習支援者の双方にとって、さまざまな方法で活用することが可能である。まず、『学習用テキスト【耕種】』を読む前に利用することで学習者の背景知識を活性化させ、内容理解の負担を軽減することができる。また、穴埋め問題や選択問題などの練習を通して、語彙を文脈の中で使用する練習を行うことができる。さらに、生成 AI を活用しているため、学習者や学習支援者が個々の学習状況に応じて学習材を作成・調整でき、個別最適な支援を行うことが可能である。

本研究の限界として、今回作成した学習材の内容的側面については検証していないため、別途、専門家の判断が必要であると考えられる。また、実際の学習者への教育実践による効果検証まで行うことができなかった。今後は、本研究で提案した学習材を実際の学習環境で活用し、その有効性を検証することが課題として挙げられる。また、特定技能 2 号制度の拡大に伴い、外国人労働者に対する日本語教育や学習支援の重要性は今後さらに高まると考えられる。本研究で示したテキスト分析の方法や教材設計の枠組みは、農業分野に限らず、他の特定産業分野や専門日本語教育の教材開発にも応用可能であると考えられる。本研究の成果を基盤として、より実践的な教材開発や学習支援に寄与していきたい。

**北 海 学 園 大 学**
**日本語教員養成課程報告書　第 11 号**

**編　集**　北海学園大学日本語教員養成課程委員会　（委員長　丸島 歩）
**発行日**　2026 年 3 月 31 日
**発　行**　北海学園大学日本語教員養成課程委員会
〒 062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号
TEL（011）841-1161（内線）2295（丸島研究室）／ FAX（011）824-7729

